り、又花見つゝ人まつ時は云々、是は菊なり、たなびく山の花のかげかも、これは桃、さくら、藤、山吹、つゝじなど、おしなべて花とのみよみしなり、後世にいたりては、花といへば、題も歌もさくらに限れり、いかにも打ちまかせて櫻を花とのみいはんに、憚るべきにはあらず、花てふ花の中にすぐれてめでたくたぐひなき花はさくらなり、かばかりすぐれたる花なき外戎は、國がらいやしき故なり、鶴林玉露に、洛陽人謂牡丹爲花、西都人謂海棠爲花、尊貴之也といへるは、事のかけたる國故なり、牡丹、海棠などこちたくいやしげにて、くらぶべきにあらず、たとへていはゞ、容貌美麗の女官の打ちとけたる姿と、厚化粧の俳優人の粧ひたる姿とのごとし、

〔日本書紀一神代〕一書曰、伊弉冊尊生火神時、被灼而神退去矣、故葬於紀伊國熊野之有馬村焉、土俗祭此神之魂者、花時亦以花祭、

〔古事記上〕故乞遣其父大山津見神之時、大歡喜而、副其姉石長比賣、令持百取机代之物奉出、故爾其姉者、因甚凶醜、見畏而返送、唯留其弟木花之佐久夜毘賣、以一宿爲婚、爾大山津見神、因返石長比賣而大恥、白送言、我之女二並立奉由者、使石長比賣者、天神御子之命、雖雪零風吹、恒如石而、常堅不動坐、亦使木花之佐久夜毘賣者、如木花之榮榮坐宇氣比氐（自宇下四字以音）貢進、此令返石長比賣而、獨留木花之佐久夜毘賣、故天神御子之御壽者、木花之阿摩比能微（此五字以音）坐、故是以至于今、天皇命等之御命不長也、

〔日本書紀推古二十二〕三十四年正月、桃李華之、

〔日本書紀舒明二十三〕十年九月、霖雨、桃李華、

〔日本紀略醍醐一〕延喜十五年九月一日己未、近者萬木華發、諸人煩赤痢、

〔古今著聞集草木十九〕嘉應二年九月上旬、京中櫻梅桃李花開て、春のそらのごとく成けり、延喜九年八月にもかゝる事侍りけるとかや、そのたびは藤柚柿などもさきたりけり、聖代に此事有、いかな